

---

# 透明人間2

山崎空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

透明人間2

### 【Nコード】

N1705R

### 【作者名】

山崎空

### 【あらすじ】

透明人間になりたい彼女と幼馴染の帰り道での一コマ。

「そつえばさ」

薄暗い帰り道。

いつもなら徐々に暗くなっていく空を拝めるのに、曇天はかわらず暗闇が2倍速で落ちてくるような感じ。

締め出される前に屋上から撤退した私は、鞆を肩にかけて歩きながら前方の少年を見た。

「何で私があそこにいるってわかったの？」

「お前の家に電話したら、まだ帰ってないって言われたんだよ」

「…電話、したの？」

「うるせえ。何か文句あんのかよ」

「…やー、べーつにー、何にもないツスよー」

一体何の用で電話したんだろうとか思ったけれど、何となく聞くタイミングを逃してしまふ。

家に帰ってないってだけで屋上にいるとあたりをつけられるほど私の行動は単純なんだろうか。

私より確実に五歩は前を歩く背中からは、奴の考えなどまったく読み取れない。

一緒に帰っているというにはいささか離れた距離。会話をすることがなければ、ただ同じ方向に帰ってるだけにしか見えないだろう。

かといってそれ以上差が広がるわけでもなく縮まるわけでもなく、というか単に私が追いつく気がないだけだ。隣で肩を並べて歩きたいと思うほど、青春したいわけじゃない。

目の前の男と私とでは歩幅も歩調も全く違う。それなのに五歩以上距離が離れないのは、奴がそれなりに気を使ってくれてると思う事か。

(ありえない)

自分の考えが馬鹿らしくなってすぐにその案は却下した。だって本当にありえない。

私に気を使うほど、奴は弱くもないし優しくもない。

会話のない帰り道。奴はポケットに手をつ込んだまま、私は空を見上げたまま、縮まりも離されもしない距離をたもったまま歩く。

「そーいえばさあ」

私はまた同じ言葉を口にする。今度はイントネーションをちよつとかえて。

「高井出くんは高校どこ受けるの力ネ？」

「あ？」

「だって私達、一応受験生でシヨ。世間一般的には」

「…お前はどこ受けたんだよ」

「私ー？ 入れてくれるとこ受けますよー。良くも悪くもないからね、成績」

周りでは友達と同じ高校に行きたいとか憧れの人と一緒にとか、そう言う理由で高校を決める子達もいるけど(もちろん明確に自分の意思をもって高校を選ぶ子だっている)、生憎と私はそう言う気持ちさがさっぱりとわからないので、自分の成績で無難な所を選ぼうと思っている。

そんな事を思ったら、登校拒否に近い出席率の目の前の少年は、どうやって高校を選ぶんだらうと素朴な疑問。そもそも高校行く気があるのかな？

頭は悪くない事は知ってる。この間の実力テストの結果は、何の気まぐれを起こしたのかやつが学年一位だった。(ありえない)  
本気を出せばきつとどんな進学校だって思いのままだらう。

「高井出は高校受けるの？」

返ってこない質問の答えに、今度は内容を変えてみる。すると五歩先の学ランは、「受ける」と短く完結に返事を返した。

「ふーん。まー、あんたは頭いいしね。今更勉強しなくても、大抵の所は受かるでしょ」

「ああ」

「うーわー、ちょっとは謙遜しなさいよ」

「うるせえ」

「うーわー」

「で、お前はどこ受けんだ？」

「…だから適当な所」

正直あんまり真面目に志望校を考えた事はない。どこでも入れればいいかと、本当にそう思う。

なりたいものもやりたい事も興味がある事もない。

学校の施設に関しても希望がない。制服だってどんなデザインでもいい。なくてもかまわない。有名だらうが無名だらうがどうでもいい。

「来週までに決めとけ」

五歩先を歩く学ランが突然そう言った。

「は？」

「志望校」

「え、ちよつと何で急に進路調査？」

何を急に言い出すのかなこの男は。担任ですら志望校は来月までに考えれば良いと言ったのに。

来週？

今日は金曜日。明日は土曜日。明後日は日曜で明々後日はもう来週。

事実上後2日で志望校を決めると、やつはおっしゃったわけです。

「まあどこにしろ」

五歩先を歩く、唯我独尊という言葉が良く似合いそうな男は振り返らずに言った。

「お前が受けるレベルのところなら、俺は確実に受かるけどな」

それは一体どういう意味でしょうか。

深読みするととんでもない方向に話が曲りそうだし、深読みしないと「俺の頭はお前のレベルと違うんだよ」とただの嫌味に聞こえるし。

だからあんた、何を言いたいのか分からないんだよ。

ぼそつと呟いた声は五歩の距離を飛んで奴の耳に届いたらしい。  
喉を鳴らすようなくぐもった笑い声を、私の耳は律儀に拾ってしま  
った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1705r/>

---

透明人間2

2011年11月16日20時45分発行